

## 蓮宗寶鑑の研究

——本書の背景、意図と歴史的意義——

安藤 智信

はじめに

今から一世紀余り前、若き南条文雄師は、英国でマックス・ミュラーに師事して、梵語と仏教学を修学中に、清国からヨーロッパの科学技術研修に來た楊文会という、若くから仏教にも強い関心をもった人物との交流が始められた。書簡による両者の交流は夙によく知られていることである。交流当初頃の書簡の中で、南条師は蓮宗寶鑑のことに言及し、楊文会に質問を發している。すなわち、

君は云う、君は曾って『真宗教旨』<sup>①</sup>をよむに、その大旨は同じくこれ衆生を無量寿仏大願海中に引導するものなりと。然るに弟は曾って廬山の説を聞くに、間々終南と異なる。終南とは善導を謂うなり。弟はすでに蓮宗寶鑑を讀めり。若し他の好書もつて廬山の宗旨を容易に解知すべきものあらば、こいねがわくわ教示されんことを。そもそも君は果して廬山に属せしか、まさに別に一家を成さんとせしか、弟いまだ知らざるなり。

君云、君曾讀眞宗教旨、其大旨同是引導衆生於無量壽佛大願海中者也。然弟曾聞廬山之說、間與終南異。終南者、謂善導也。弟已讀蓮宗寶鑑。若有他之好書、以可容易解知廬山宗旨者、請幸教示。抑君果屬廬山乎、將別成一家乎、弟未知之也。(楊文會『等不等觀雜錄』卷七。「與日本南條文雄書」二の南條師からの來書)

とみえる。明治十三年頃のことである。南條師は廬山慧遠流の念仏を理解する一助として『蓮宗寶鑑』を読んだと思われる。結果として南條師の目的は十分に達成させられなかったようである。このことに本書のねらいがいかにかに把握したいかをよくあらわされていると思う。

ここではできるだけ正面から、本書が普度によって撰述されるに至る背景と意図について考察しようとするものがある。

## 一

蓮宗寶鑑はどういう背景のもとに著わされたのであろうか。著者の普度自身が、本書の本文を脱稿してのち、大徳九年に一氣呵成に執筆したとおもわれる「廬山蓮宗寶鑑叙」を著わしている。この一文をみると、本書執筆の動機とその意図がどこにあるかということが、強い力感をもって迫ってくるおもしろい。とくに普度が在住した頃の廬山について述べている部分からみておこう。普度が本書を執筆した據点である廬山の情勢がよくうかがえるからである。

つつしんでおもう、大元は普天一統し、諸国來朝して人心は善を樂しむ。廬山東林禪寺の東岩圓應日禪師はつつしんで聖旨を奉じ、道場に住持し、梵宇を修營し、諸賢傳を集め、すなわち古を追いて宗綱を整う。大法橋を架<sup>か</sup>け、宗遠と名ずけて祖道を開けり。一十八載、宗乘を提唱するのほか、常に念佛三昧をもって人天を開導す。

至元壬辰の秋慶元路育王山廣利禪寺の請いに赴き、席を開先の悦堂闇禪師に遜り、あい継いで住持す。元貞元年正月に、述明居士燕覺道破衣和尚はつつしんで聖旨を奉す。白蓮宗善法堂護持教法を賜わる。元貞二年正月またつ、しんで聖旨を奉じ、通慧大師と白蓮宗主を賜わり、よって金襴袈裟を賜わる。大徳五年十月につ、しんで聖朝の頒降せし御香と金幡を奉じて寺に到る。

欽惟大元普天一統、諸国来朝、人心樂善。廬山東林禪寺東岩圓應日禪師欽奉聖旨、住持道場、修營梵宇、集諸賢傳、乃追古而整宗綱。架大法橋、名宗遠、而開祖道。一十八載提唱宗乘之外、常以念佛三昧、開導人天。至元壬辰秋赴慶元路育王山廣利禪寺請、而遜席于開先悦堂闇禪師、相繼住持。元貞元年正月述明居士燕覺道破衣和尚欽奉聖旨。賜白蓮宗善法堂護持教法。元貞二年正月又欽奉聖旨、賜通慧大師白蓮宗主、仍賜金襴袈裟。於大徳五年十月欽奉聖朝頒降御香金幡到寺。(T47、三〇四a b)

右の記事のなかに、東巖淨日、悦堂祖間らが東林寺に住持となった頃に東林寺で念佛三昧や白蓮宗の教化がさかんであり、新しい元朝政府も理解を示したことを述べている。もう一人の登場人物燕覺道についてはほかに詳細な史料が見当らない。祖間の住持の時期に白蓮宗の公許を元朝からとりつけのために努力した特別な存在であったらしい。ところで淨日と祖間は普度の『宝鑑』に対して賛辞を寄せて、その完成を喜んでいる。その賛辞の紹介に先だつて、淨日と祖間の二者にはいずれもくわしい「塔銘」が存している。東林寺に関する部分の記事を中心に紹介しておく。なぜならわたくしのみるところ、二人ともに普度とは東林寺で行業を共にしていた間柄であったという見方をとるので、煩を厭わずみておく必要があるのである。

東巖淨日については元の袁桷が「天童日禪師塔銘」を、悦堂祖閻には同じく元の黄潛が「靈隱悦堂禪師塔銘」を書いている。

淨日（一二二一—一三〇八）は東巖と號し、南康軍都昌（江西省）の廖氏の出身で、十六才のとき廬山の香林院で落髮出家した。以後禪門の俊傑たち、すなわち癡絶道冲、無準師範、西巖了恵らに歴参して奥旨に達した。さらに「塔銘」はつけて次のごとく記している。

のち開先の無文璨は屈して第一となす。璨もまた僧の俊傑なり。これより譽聞益々彰わる。宋の景定某年に江東の帥、汪公立信は慎んで許可し、推してもつて圓通を主らしむ。つかさど咸淳某年に江東の漕使の錢真孫は東林をも兼領せしむ。至元壬辰に育王を主る。三年して雪竇に歸隱す。大徳四年公議を集められ、天童を主る。師の行は峻絜もつて完く、語は温氣もつて衆に和す。ますますもつて親しくその徒を納れ、明徹復性せしむるを得たり。言に修らずしてその蔓惑を解く。世に處するには施すところなきがごとし、ために遐とほきも邇ちかきも嚮慕す。傑閣銅象はなけれど、踵かかといでもつて至りしこと天童の功もつとも著わる。久しく東林に居て、俗を化し衆を警いましめたれば、民は争い繪えいしてもつて祝う。故にその天童を興さんとするに、廬山の民、貲を奉じてもつて助すくこともつとも夥し。

後開先無文璨屈為第一。璨亦僧之俊傑。諸是譽聞益彰。宋景定某年江東帥汪公立信慎許可、推以主圓通。咸淳某年江東漕使錢真孫俾兼領東林。至元壬辰主育王。三年歸隱雪竇。大徳四年集公議、主天童。師之行峻絜以完、語温氣和衆。益得以親納其徒、俾明徹復性。不侈于言、解其蔓惑。處於世若無所施、為遐邇嚮慕。傑閣銅象無、

踵以至而於天童功最著。久居東林、化俗警衆、民爭繪以祝。故其興天童、廬山之民奉質以助尤夥。 (四部叢刊)

本、袁桷『清容居士集』卷三十一、「天童日禪師塔銘」)

まずこの記載によつて、咸淳年間から至元二十九年(一二九二)まで東林寺の住持となつていたことを知る。先の普度の「叙」文では東林寺住持の期間を十八年とみているから、在任期間は両史料ともほぼ合致する。「塔銘」によると、浄日の廬山の民への教化の影響はきわめて大きかったことが強調されている。特に「化俗警衆」とか、「廬山の民」という表現に注意される。廬山での教化の内容が俗衆に受容され易い念仏の勧めであったことを予想せしめるではないか。すなわち普度が「叙」で、「一十八載提唱宗乘之外、常以念佛三昧、開導人天」といつていることと一致することとなる。

次に東巖浄日のあと、東林寺の住持の地位をついだ人が悦堂祖閻である。

祖閻(一二三四―一三〇八)は廬山の西林寺ならびに東林寺という二つの名刹にかかわりが深く、至元三十年(一二九三)から大徳九年(一三〇五)まで十三年間にわたつて、東林寺の住持をつとめており、優曇大師普度とは東林寺で同じ時期・長期間にわたつて行動を共にして、両者は知悉の間柄であつたことはまちがいない。祖閻は大徳九年に東林寺から杭州の名刹靈隱寺四十八代住持となり、四年足らずの在任で死去している。「塔銘」のつたえるところによると、祖閻はなかなかの快僧だつたようである。モンゴルの軍隊が江州をおそい、西林寺に踏みこんだ折のこととして次のような記事がみえるが、その風格がよくうかがえる。

国朝至元十二年、宋を取るの師は江右に至る。居人みな避けて山谷の間に匿る。師ひとり一室に宴坐するに、軍士は刃を挟んでもつてこれに臨む。刃、頸に及して問うて曰く、「懼ろしきか否か」と。師いわく、「吾れ生死

なし、何の懼ることあらんや」と。軍士すなわち刃を投げて拜み、かつ師に遺るに白金をもってするも、師また顧みず。它の軍士らみな驚服して散り去る。一境のうち、頼りてもつて恐れなし。二十五年に開先に遷り、法會ますます盛んにして、名は上に聞こゆ。

国朝至元十二年取宋之師至江右。居人咸避匿山谷間。師獨宴坐一室、軍士挟刃以臨之。刃及頸問曰、懼否。師曰、吾無生死有何懼乎。軍士乃投刃而拜、且遣師以白金、師亦弗顧。它軍士皆驚服散去。一境之内頼以無恐。二十五年遷開先、法會益盛。名聞于上。(四部叢刊本、『金華黃先生文集』卷四十一の「靈隱悅堂禪師塔銘」)

モンゴルの蹂躪のなかにみづから身命をさらす相聞のうえに、遠く東晋のいにしえに、この同じ廬山にあった慧遠が、そのときは異民族の侵入ではなかったけれども、禮敬問題をめぐって桓玄と対決する故事との符合を念頭に思い浮べさせられるほどである。なお黄潛の記事は右につけて東林寺での相聞の行蹟に言及するので、知っておく必要がある。すなわち、

(至元)三十年に命ぜられて東林に遷る。東林は大利なれども恒産もとより薄く、屋壞るるも治すことなし。師は受くるところの施資と置田若干畝をもつて、殿堂門廡を葺き、これを一新せしむ。廬山は匡先生をもつて名を得ると謂い、寺傍の道宮の地を購い、室を築いて禮祠す。元貞元年詔を奉じて闕に赴き入對するに、旨にかない聖書と通慧禪師を號すること並びに金欄法衣を賜わり、榮をもつてそれ歸る。大徳九年靈隱に虚席あり。行宣政院は師をしてこれをつかさどらしむ。

(至元) 三十年被命遷東林。東林大刹而恒産素薄、屋壞弗治。師以所受施資置田若干畝、茸殿堂門廡、使之一新。謂廬山以匡先生得名、購寺旁道宮之地、築室而禮祠焉。元貞元年奉詔、赴闕入對、称旨賜璽書號通慧禪師并金襴法衣、以榮其歸。大德九年靈隱虛席。行宣政院傳師主之。

という。

まず普度の「叙」の内容とくらべて大きく相違するところは、黄潜(一二七七—一三五七)のかいた「塔銘」の方には、白蓮宗のことに全く言及していないことである。小さな相違は祖闡が通慧禪師號などを賜与されたときを「叙」の記載より一年前の元貞元年としている点である。黄潜がなぜ白蓮宗に関する事柄を削っているのかその真相をつまびらかにしない。祖闡の弟子の希清らが塔銘執筆を黄潜に依頼したときのことについて、祖闡の塔の建設から数えりと三十七年を経過していると塔銘にある。祖闡の歿年は至大元年(一三〇八)であるから、「塔銘」の執筆は早くても、至正五年(一三四五)のこととなる。思うに元末に韓山童らが白蓮教の名を仮りて反乱をはじめた直前ころのことであり、筆者黄潜としても「塔銘」から、混同と誤解を生むことを懸念して白蓮宗の事蹟を削除したのではなからうか。蓮宗寶鑑の著者、普度の生歿年については、清の彭希諫の『浄土聖賢録』巻四の普度伝の末に「至順初化去」とある程度である。しかし彭氏は清朝の人で、普度から大変に時代がさがることになるので、嚴密には彭氏の據った史料の検出が待たれることとなる。従つてこれだけからでは優曇普度と東巖浄日、悦堂祖闡両氏との年令差はわからない。しかしいずれにしても普度の周辺に浄日とか祖闡というような傑僧のいたことは、普度が蓮宗寶鑑を著わすに際して、大きなうしろ盾となったにちがいない。いまわれわれが手にする『蓮宗寶鑑』の末に、「名徳題跋」十一章をおさめている。浄日と祖闡のものが第一、第二番目に配されている。普度との関係からいって極めて至当なことである。

他の九通の題跋とは本書へのか、わる比重に大きな相違がある。淨日と祖闕こそ普度について知りつくし、蓮宗寶鑑執筆の意味をもっともきびしく吟味した上での理解者であるといふべきであろう。それでは淨日の跋語からみてゆゑのこととする。

余は嘗に、それ今の所謂蓮社を崇ぶものを観るに、多くは遠祖の意にもとずかざるなり。たゞその進修の序を失するのみならずして、またかつ邪師の謬解に惑わさる。深く未だよくその弊を救うものあらざるを恨む。優曇大師、すなわち経論伝記を採り、古今の名儒宿衲に至るまで、もろもろの善言を集め、刪潤著述して、一書すべて十卷を成り、蓮宗寶鑑という。正論を立て、もつて邪説を破り、真知を發してもつて妄情を祛く。その理を云うや深く明らけし、その事を叙ぶるや詳しく盡せり。三教を會せて一源に歸せしめ、一己を正してもつて衆信を規む。鏡の像を照らすごとく洞然明白なり。豈にたゞにもろもろの善流をして専ら弥陀を念じて淨土に生れんことを祈らしむるのみならんや。まさに人人の本心より明かし、本性より見て、地に立ち成仏してのちやまんと欲せしなり。余は余がかつて東林に主たりしをもつて、語を轉えんことを求め證となさんと欲せり。返復すること數過にして、眞に我が心の同然とするところのものを得たり。すなわち合掌西嚮してこれに歸していわく、「善哉善哉、如是如是なり」と。ときに乙巳大徳八年八月十五日 明州天童圓応淨日題す。

余嘗觀夫今之所謂崇蓮社者、多不本遠祖之意。非惟失其進修之序、亦且惑於邪師謬解。深恨未有能救其弊者。優曇大師乃採經論傳記、至於古今名儒宿衲、集諸善言、刪潤著述而成一書凡十卷、曰蓮宗寶鑑。立正論以破邪說、發真智以祛妄情。其言理也深而明、其叙事也詳而盡、會三教而歸一源、正一己以規衆信。如鏡照像、洞然明白。



豈特俾諸善流專念弥陀祈生淨土。直欲人人明自本心見自本性、立地成佛而後已。余以余嘗主東林、欲求轉語為證。返復數過、真得我心之所同然者。乃合掌西嚮而歸之曰、善哉善哉、如是如是。貴乙巳大德八年八月十五日 明

州天童圓應淨日題（T 47、三五二 a b。なお正保四年刊の和刻本『廬山優曇寶鑑』で校勘を加えた）

淨日がこの文を書いた日付が大德八年八月十五日となっているのは興味ぶかい。普度の本書の「叙」が書かれたのが翌大德九年のことであるから、それより一年前にすでにこの淨日の題跋は書かれていたことになる。文中に、「返復數過」とあるところからみると、廬山の普度と天童山の淨日との間で幾回となく、内容についての吟味応酬のあったことを物語っている。そのことは淨日が普度の宝鑑に対する厳しい態度を示していると共に、それだけ出来ばえについての淨日の期待も大きかったことを物語るものといえよう。次に祖闍の跋語へ進もう。

宝鑑は照心の鏡なり。鏡は明をつかさどれば、すなわち一切の昏迷を燦し、一切の妍醜を辨ず。これを當臺に懸ければ、見えざるところなし。東林祖堂の優曇大師の名は普度、正知見を具し、毎に蓮宗の謬解は真に乖けるを念えり。儒釋の書を折衷して撰して宝鑑十巻をつくれり。念仏正宗三昧を發明するに、すべて一字々々一句々々、これを佛祖龍天に質し、並てこれ魔説を掃空し、実に法門の一大條貫をつくる。その用意は誠かつ公、勤かつ苦なり。扶宗勇敢の心は十八賢の立教の心と閏細を共箇にす。聞くものも見るものも咸な通途に趨る。あるいは順がい、あるいは違うものも共に清泰を一にす。また偈をつくりて云わん、「千載に、蓮宗は宏正の論。明かに逾え、宝鑑は青霄に挂かる。今まさに印板打成んとす。萬両の黄金も消すべし。」と。

白蓮宗主 書

寶鑑者照心之鏡也。鏡主乎明則燦一切昏迷、辨一切妍醜。懸之當臺、靡所不見。東林祖堂優曇大師名普度、具正知見、每念蓮宗謬解乖真、折衷儒釋之書、撰為寶鑑十卷。發明念佛正宗三昧、凡一字一句、質之佛祖龍天、並是掃空魔說、實為法門一大條貫。其用意誠且公、勤且苦、扶宗勇敢之心與十八賢立教之心共箇闕細。聞者見者咸趨通途、或順或違同一清泰。復為偈云、千載蓮宗宏正論、明逾寶鑑挂青霄、今將印板打成去、萬兩黃金也合消。

白蓮宗主 書 (T、47、三五二b。なお、正保四年刊の和刻本『廬山優曇寶鑑』で校勘を加えた)

文末に記する「白蓮宗主」だけでは悦堂祖聞であるとみることが早計となるが、本書の冠頭の目録では、「廬山白蓮宗主悦堂和尚跋語」と詳しく明記されていることよってそれが知られる。

なおこの文には書いた年時が明記されていないけれども、祖聞の没年が至大元年（一三〇八）であるから、それ以前ということになるし、文中の「今將印板打成去」という語句からすると、本書の印行は脱稿後たゞちに行われたこととなる。しかるに至大元年五月に白蓮宗への禁圧がある。同年十月に普度は廬山を降りて京師の大都へのほり、降福宮に赴いて皇太子に蓮宗寶鑑を捧げている。その記事中に普度が皇太子に向って本書を捧呈したとき、あわせて、「令旨を奉じて板に刊り印行せしめしものなり」(T・47・三〇三a)と申し上げている。まことにさきの祖聞の偈句とよく呼応するといわねばならない。

## 二

著者の普度がいた東林寺には元貞元年には白蓮宗善法堂なる存在が公認された。普度にとって画期的なことだったにちがいない。東林寺の住持悦堂祖聞を中心に普度や燕覚道らの努力が一つの結実を見たわけである。この頃から普

度は『蓮宗寶鑑』の作製を思いたち、約十年をかけ大徳九年に脱稿したと思われる。當時の東林寺は禪を宗乗としながら、先にみた天童浄日のごとく、「常に念佛三味をもつて人天を開導す」という側面があった。即ち禪浄並修の実践をめざす寺であったことがわかる。白蓮宗善法堂とは東林寺の教学の浄土教の側面を荷負うわけであろう。大徳九年頃、そこでの専任の指導者が普度であった。明版大藏經におさめられる『蓮宗寶鑑』では、各巻ごとその冒頭に、「廬山東林禪寺蓮宗善法祖堂勸修浄業、臣僧普度謹自編集」の語句を必ず入れている。「蓮宗善法祖堂」とともに、とくに「勸修浄業」という肩書が興味深い。これらの表現により普度が東林寺の浄土念仏部門の最高責任者であるということが、如実に示されているのではないか。そのような重い任にある普度が、元貞元年にその教団活動を国家からも公認されたときを契機として、白蓮宗浄土教なるものをその時点で徹底的にみなおすなかで、今日的体系化をはかろうとしたのはきわめて自然なる成りゆきであつたろう。その成果が蓮宗寶鑑である。

蓮宗寶鑑は十巻から成る。普度は本書の「叙」の中で、各巻の意図と、本書全体の性格を次のごとく概括する。

予すなわち心を浄土に翹あげ、先宗を探蹟し、要言を編集し、目めけて寶鑑たしい、眞偽を照明すること、すべて一十篇なり。そのはじめは念仏正因という、室に入るに必ず戸に由るを謂うなり。次は正教という、すなわち念佛法門は漸偏頓圓なるを示し、進修者をして根器に随つて至道に歸せしめんとなり。またその次を正宗という、蓋し念佛三昧正心の理を示し、修習者をしてその宗を明らかにしてその本に達せしめんとなり。またその次を正派という、蓋し佛祖およびもろもろの宗師の得道の本末を明かにし、後学をしてそのよるところあるを知らしめんと欲せばなり。またその次を正信・正行・正願という、正法を信じ、正行を修し、正誓まことを發たして西方に生れんことを求めしめんとなり。次は往生正訣という、蓋し臨終に浄土に生るるの路を示す。次を正報という、蓋し修

行して得るところの浄土の依と正との功德莊嚴を明らかにするなり。次は正論という、蓋し諸仏の誠言を引いて群邪の異見を破す。不善を改めて善に従わしめんと欲せばなり。

敢えて宗風を助くることあるにあらずして、未だ聞かざるものに益せんがためなり。その枉れるものは直く、邪なるものは正しくし、疑えるものは決め、迷えるものは悟ることを欲せり。ことごとく大地の人よ、この一念中にとともに念佛三昧を得て、共に菩提を證すること、また偉いならざらんか。

予乃翹心浄土、探頤先宗、編集要言、目曰寶鑑、照明真偽、凡一十篇。其首曰念佛正因、謂入室必由戸也。次曰正教、乃示念佛法門漸偏頓圓、使進修者隨根器而歸乎至道也。又其次曰正宗、蓋示念佛三昧正心之理、俾修習者明其宗而達其本也。又其次曰正派、蓋明佛祖既諸宗師得道之本末、欲令後學知有其自也。又其次曰正信・正行・正願、俾信正法修正行發正誓而求生西方也。次曰往生正訣、蓋示臨終生浄土之路也。次曰正報、蓋明修行所得浄土依正之功德莊嚴也。次曰正論、蓋引諸佛誠言、破群邪異見、欲令改不善而從善也。

非敢有助於宗風、為益於未聞者也。欲其枉者直之、邪者正之、疑者決之、迷者悟之、盡大地人於一念中同得念佛三昧、共證菩提、不亦偉歟。(T 47、三〇四b c)

右の引用文中、改行前は卷ごとの意趣を述べ、改行後の部分は本書全体の性格と意図を著者自身が簡潔に表明しているのである。

特に後者の部分の「非敢有助於宗風、為益於未聞者也」というところがわたくしはきわめて重要におもう。普度は本書において、決して「あえて宗風を助けることあるにあらず」といつていることの意味は、浄土教をきわめひろめ

てくれた先人たちの伝燈の所産に、普度がこゝで新たなものを加えるということでは決してないということの表明であると思う。既にそれまで、中国千三百年の仏教史の中で浄土教の可能性は出揃っていた。それにもかゝらず、當時の白蓮宗をとりかこむ内外の情勢は正邪混迷の様相を呈し、念仏正宗の伝燈は堙滅の危機をすら普度には感ぜしめた。そこへつけこむように元朝政府の干渉も露骨となる中で、浄土念仏の正当性を強く訴えることが、普度にとって緊要な使命感として昂揚されていったにちがいない。すなわち新しい浄土教哲学を開陳するということよりも、既にある念仏三昧の累々たる歴史遺産の再検証を行い、それを普度のことばになおすことによつて、念佛について整然と聞いたこともない人たちにも、正しくわかつてもらえるようにという懇念からの著述であると普度はいつているのである。

先学諸家の本書の内容についての印象や見解も、内容的には新味がないということを異口同音されている。おそれなくその通りであろう。おもうに中国へ仏教が伝播してより約十三世紀を経た当時、浄土教義についての諸説がすでに出つくし、新たな画期をその面で求める方が無理ですらあるというべきかも知れない。それは後世を生きるもの、さだめともいうべきであろう。時間がおくれるほど多くの所産の累積は増大する。その過去の累積所産を、ひとはそのおのれが生きる今に立って点検して問いかえし、自分のことばをもつて体系づけたものをもつて、歴史創造に参加することの意味こそが重要なのである。普度の『蓮宗寶鑑』での浄土念佛の再検証の苦斗の歴史的意味もそこにあつたとみなければならぬであろう。普度の行業のうえに、のちの世を生きるもの、さだめがよく表明されているとわたくしは思う。

## 注

- ① 東本願寺が、明治九年に刊行し、中国での真宗布教用として漢字文で書かれた小冊子である。
- ② 無文道璨のこと。
- ③ 汪立信は『宋史』卷四一六に立伝されている。
- ④ 明の『増集續伝燈録』卷三、同じく『五燈会元統略』卷三に立伝されるが、いずれもこの『金華文集』の「塔銘」を参考していることである。
- ⑤ 普度の「叙」では、「禪師」を「大師」としていることも相異点である。
- ⑥ すなわち、「塔銘」に「塔成後三十有七年、希清及希白等若干人以状來謁」とみえる。
- ⑦ 「塔銘」に、「至大元年七月二十四日、靈隱四十八代悅堂禪師告寂于丈室」とみゆ。
- ⑧ この事柄については、拙稿△元の普度撰「上白蓮宗書」の歴史的意義▽（仏教史学会編『仏教の歴史と文化』）でもとりあげている。
- ⑨ 「蓮宗」の二字はもと「白蓮宗」となっていた。和刻本『廬山優曇寶鑑』とよみくらべてみると、明版大藏経本の方で、「蓮宗」としている語が、ほとんど「白蓮宗」となっているようである。おもうに明版の本書は崇禎十六、十七年につくられた。すなわち明末に際し、白蓮教が猖獗をきわめたときであり、国家の事業としての大藏経に「白蓮宗」の字は不吉とされて、「蓮宗」のみ残すという風に改めたにちがいなからう。
- ⑩ たとえば野上俊静先生述の「蓮宗寶鑑」の項△『アジア歴史事典』9▽の解説参照。